

図表2 A社の貸借対照表(3期分)

単位:百万円

勘定科目	前々期	前期	今期	勘定科目	前々期	前期	今期
【流動資産】				【流動負債】			
現金預金	111	141	225	支払手形	799	832	758
受取手形	173	166	275	買掛金	575	734	1,023
売掛金	3,130	3,187	3,432	短期借入金	2,375	2,419	2,572
棚卸資産	1,341	1,386	1,535	未払金	39	40	34
前渡金	174	179	316	その他流動負債	104	104	86
短期貸付金	204	181	231				
未収入金	161	171	221				
その他流動資産	22	21	18				
貸倒引当金	-3	-3	-3				
流動資産合計	5,293	5,429	6,250	流動負債合計	3,892	4,129	4,473
【固定資産】				【固定負債】			
(有形固定資産)				長期借入金	301	168	519
建物及び付属設備	52	47	43	長期預り保証金	3	3	128
工具器具備品	16	13	12	固定負債合計	304	171	647
土地	11	9	6	負債合計	4,196	4,300	5,120
(無形固定資産)				【純資産】			
(投資その他資産)	12	8	5	資本金・資本剰余金	336	336	336
固定資産合計	245	230	267	利益剰余金	1,086	1,113	1,157
繰延資産	16	35	48	純資産合計	1,422	1,449	1,493
資産合計	5,638	5,749	6,613	負債・資本合計	5,618	5,749	6,613
				割引手形	1,762	1,942	1,742
				裏書譲渡手形	2	5	2

(出所)筆者作成

P/Lの粉飾は、③資産の過大計上、④負債の過小計上として、B/Sに痕跡が残る。そのため、資産・負債の大幅な増加が見られたら、経営者に質問し原因を説明する必要がある。

次に、収益性分析を業種別経営指標と比較しつつ、時系列で見ることが重要だ。A社の例を18ページの図表3から確認しよう。

総資本経常利益率は収益性の総合指標である。A社は前々期2・2%、前期1・7%、今期1・3%と年々悪化しており、経営指標11・7%と比べても非常に低い。

総資本回転率は資産の効率を示す指標だが、こちらも前々期2・1回、前期2・1回に対し、今期は1・8回と悪化している。

売上高に対する各利益段階の比率も業種別経営指標より低く、特に売上高総利益率が

今期14・4%と、経営指標30・8%に比べ著しく低い。これこそ収益性が悪い原因で、商品力あるいは販売方法に課題があると考えられる。

総資本経常利益率のもう1つの構成要素が、回転期間である。B/Sを読むにあたって、売上債権と棚卸資産は特に粉飾に使われやすい資産として覚えておきたい。

回転期間分析は、こうした勘定科目の不良資産をあぶり出す働きをする。

A社の回転期間分析だが、図表4のとおり、まず受取勘定回転期間は前々期5・1カ月、前期5・3カ月、当期5・4カ月と悪化傾向だ。経営指標の倍以上も回収サイトが長く、回収不能の売掛金などが疑われる。

A社のビジネスモデルも加味し、5・4カ月の回収サイクルが妥当かどうかを精査する必要がある。加えてP/Lの

定量面の変化で見抜く！

財務諸表から経営悪化のシグナルをつかもう

財務指標と回転期間を用いた分析と、業種別の財務諸表の着眼点について解説する。

図表1 A社の損益計算書(3期分) 単位:百万円

勘定科目	前々期	前期	今期
売上高	12,039	12,004	12,090
売上原価	10,264	10,237	10,345
うち減価償却費	0	0	0
売上総利益	1,775	1,767	1,745
販売費及び一般管理費	1,691	1,702	1,684
うち人件費(役員含む)	993	983	965
うち減価償却費	12	10	9
営業利益	84	65	61
営業外収益	67	62	59
営業外費用	29	27	32
経常利益	122	100	88
特別利益	0	0	0
特別損失	25	33	20
うち貸倒損失	0	33	20
税引前当期純利益	97	67	68
法人税、住民税等	31	40	24
当期純利益	66	27	44

(出所)筆者作成

財務諸表を読む手始めとして、ざっくりと実数値の科目増減を眺めてみよう。

A社では前期から今期にかけて、総資産が15%、8億6400万円も増加している。内訳は売上債権(受取手形、売掛金)、棚卸資産、前渡金、短期貸付金、未収入金などの流動資産が8億2100万円と大部分を占める。

一方、負債は支払勘定(支払手形、買掛金)が2億1500万円、長期借入金が3億5100万円、長期預り保証金が1億2500万円などと増加している。

ここではP/LとB/Sの運動性を頭に入れておこう。会社が粉飾として利益の水増しを行う方法には、①収益の過大計上、②費用の過小計上の2つがある。結果として

1 回転期間分析を用いて経営悪化を見抜こう

取 引先の経営悪化のシグナルは財務諸表にも表れる。ここでは実際に経営破綻に至った企業を基に、経営悪化の兆候を早期に見抜くための着眼点を紹介する。

A社は全国に営業拠点を構える、理化学機器や医療機器の専門商社である。国内外の仕入ネットワークの強みを生かし、3期連続で売上高は120億円を記録。経営は安定しているように見えたが、翌年資金繰りに行き詰まり民事再生法を申請し経営破綻した。

まずは実数値の科目増減を眺める